# 言語学習から「関係」を覗く

楊　暁捷

「関係」、中国語も同じ文字の組み合わせで〝関係(グァンシー)〟、とてもユニークな言葉である。

〝関係〟は、中国の文化や社会の様相を語る格好の切り口だ。その明らかな証拠に、いまや日本語の「タテマエ」「ケイレツ」「オモテナシ」などのように、そのまま英語の語彙に仲間入りを果たした。ただ英語で語るそれには、異質的で、ほかの言葉では置き換えできないというニュアンス以外、ほかのなにものも託されていないから、事情は単純だ。日本語となれば、関係とグァンシーとの微妙な重なりと異なりは、言葉と文化の重層をさまざまな形で探索することを誘ってくれる。

日本語作文のクラスに通う一人の学生の不思議な表現を紹介してみよう。つぎのようなフレーズである。

「自分が関係で感じた無力感」

上級の学生らしく、一つひとつの言葉選びから真剣さや迷走ぶりが感じられる。ただし、言いたいことは伝わらない。この学生は中国語をバックに持っているという事実を知って、はじめて何らかの推測の目途が立つ。一番のキーは、「関係」で表そうとする意味なのだろう。中国語の辞書を調べれば、〝関係〟には、原因、条件などの意味合いが上位に挙がってくる。これを理解できれば、ようやく修正の見当が見えてくる。文の構成を努めて維持しようとすれば、「自分自身が理由で生じた無力感」、あるいは文をシンプルに切り落とそうとなれば、「自身に由来する無力感」で十分だろう。言い換えれば、言葉の意味にはかなり重なっていても、〝関係〟の発想から「関係」を持ってきても、日本語としては機能しないということである。

＊　＊　＊

考えてみれば、〝関係(グァンシー)〟には、じつにさまざまな意味合いが託されたものである。

核となる意味として、関わり、関連性などを指摘できよう。これの場合、言葉には特定のニュアンスがあるわけではなく、軽い冗談や丁寧な釈明から、重大な事情などにかかわる言い争いや言い返しなど、文脈により言葉のカラーは変幻自在だ。一方では、そこから延長して到達した特定の意味合いはまた尖っている。社会生活の中で探し求めたり、疎ましく思った

りする人間同士の繋がり、組織間の転勤転職などに確証となる書類、はては男女の間に生じるとりわけ性的な行動など、じつに多種多彩だ。個人的には、記憶の隅に押し込まれたささやかな思い出がある。大学生となって北京に住み始めたころ、知人が通った大学の名前に〝関係〟が入ったのを知って、少なからず驚いた。きっとそれまでに自分自身がもっていたこの言葉への感覚に合致しなかったことから来た、違和感と新鮮さが相混ざった衝撃だったのだろう。

そこで、日本語学習者として、日本語の語彙を一つひとつ覚え、使っていくというプロセスを踏むようになった。中国語をベースに日本語にアプローチするにあたり、基礎語彙の学習はおそらく一番負担が軽く、その中で、「関係」のような言葉はほとんど気遣うことの少ない部類に入るものだった。たいていの場合、なんとなく漫然と使っていたに違いない。あえて加えるとなれば、ある程度の応用を心得てから、中国語の感覚に捉われてはならない、どこかで立ち止まり、中国語の感覚を忘れて、日本語の語彙を日本語の文脈で理解すべきだとの自戒が生まれはじめた。それにかけて、「関係」における関も係も、対応する中国語の文字を含みながらも、どれも別の部首が入り、文字の画数も多いという事実は、〝関係〟とは別の言葉だとつねに思い起こさせ、どこか落ち着いていて、意味や使い方を振り返るきっかけを与えてくれているような気がした。

＊　＊　＊

「関係」と〝関係（グァンシー）〟、たしかに互いに大きく重なりあう表現である。

日本語においても、「関係」はニュートラルでクリーンな言葉ではあるが、前後の言い回しに組み入れれば、最大の尊厳にも最強の非難の文言にも仕立てられる。一方では、逆の方向に持っていけば、一時期、国民的なフレーズにさえなった「そんなの関係ない」が記憶に新しい。不思議なぐらい人々の口に上がったこのジョークは、思えばキーとなる語彙が持つ由緒正しい語感からの落差が笑いを誘うためにきっと一役を買っているのだろう。「関係」と〝関係〟、日本語と中国語におけるこの言葉の中核を成す意味合いや使い方は、言ってみればほぼ完ぺきに重なりあっている。

このように見ていれば、前出の誤用例の読み方もなんとなく変わってきた。理由を意味する「関係」の使い方は、日本語には皆無ではないのだ。かなり頻繁に用いられる「時間の関係で」といったような表現は、まさに時間が十分ではないということが理由だと説

明しようとしているものである。しかしながら、一方では「時間の都合上」など、より慎重で誤解の少ない表現が存在し、しかも理由を意味する「関係」は、むやみに使用例を広げることはないという傾向がある。「わたしの関係で」といったような表現は、ぜったいにあり得ないと言わなくても、実際の言語生活の中で努めて避けるものだと理解してよかろう。

　これに対して、〝関係〟の使用例において、基本の意味から離れて特定の意味合いに到着したもの、日本語に直せば「コネ」「人事」「情事」といった使用法は、それぞれにおいて独特の表現の世界を形成し、日本語における「関係」とは関わりを持たなくなった。言葉の組み合わせが同じであっても、コアとなる意味が重なっていても、使用法が日本語と中国語においてそれぞれの方向に展開したことは、まさに生きた言葉の現状をなによりも物語っていると言えよう。

＊　＊　＊

　かなり重層になる言葉の意味、意味伝達を保証する活用、そして豊富な表現、これらのすべては、外国語としてそれを習う学習者や、語学を手伝う教師に大きな挑戦を課している。

　中級や上級の外国語学習者には、語彙の量を増やすことがもっとも基礎的なタスクだろう。とりわけ成人の学習者には、意図的で貪欲に言葉を覚えていくことが、上達の必須条件だと考えられている。辞書を読破し、極端なやり方だと覚えたページを破り捨てるような猛者の伝説もよく聞く。一方では、それだけではけっして外国語の学習は完成しないというのも、自明の道理である。母国語に立脚して言葉の意味合いや使い方を覚えたとしても、それらの一つひとつをつねに実際の使用の中で確認し、慎重に、あるいは無意識に修正を繰り返さなければならない。その過程において、偏ったもの、思い込みをしたものを消去し、よりぴったりした表現、正確な言い回しにたどり着く。学習者の語学力はけっきょくのところ実際の使用において伸びていく。練りに練った文章は無残に添削され、自信をもって発した言葉は聞く人から妙な表情を引き出す。そのような伝わらなかった経験、ギクシャクした苦い思いは、結局のところ上達に繋がる。そして、このような状況に出遭うにあたっての感受性は、勝負の分かれ目であり、学習者の質を決めてしまう。これらすべては、辞書を読み解くだけではとても到達できない境地であることは、いうまでもない。

　中国語話者として日本語を覚えようとして「関係」に直面しての状況もいまの見立てから外れるこ

とではない。原因という意味も自然とこの言葉に託そうとし、一部の用例を見ればその確信が固まり、やがて誤用や不自然な言い回しとして改められ、特定の意味の使用範囲に気づく。対して、「コネ」というはるかに生き生きとした表現、就職や人事異動などにはまったく異なる社会の仕組みが働いていることを知って、「内定」「ヘッドハンティング」などを覚えても、〝関係（グァンシー）〟に戻ることはもはやない。言い換えれば、たとえ中国語がベースにあって、基本語彙にかなりの重なりがあっても、母国語を通過しないでターゲット言語の語彙が身につく状況がすこしずつ増えていく。その意味において、さきの学生の誤用は、まさにこのような学習の階段を上っていく過程に他ならない。

＊　＊　＊

語学学習は、単に対象の言葉を話せるようになることには留まらない。一つの言語が身についてくるプロセスは、まったく異なる社会文化、それにまつわる価値観、そして、言葉の発想や展開の論理への発見を伴う。しかもそれはターゲット言語だけではなく、それまで使いなれてきた母国語への再認識に導く。あえて言えば、これこそ言葉を学習する者の極意であり、学習者を育てる者のやり甲斐である。